

グリエヴァ・イズミラ
歴史学博士

旅行家たちが語る アゼルバイジャンの絹

アゼルバイジャンで、日用品の芸術的手工業のうち有数の普及を見せていたものの一つが織物づくりである。バクー、タブリーズ、ギャンジャ、バルダ、ベイラガンといった中世都市の生活と経済において、織物づくりは大きな役割を演じていた。このことは、数多くの文献や旅行家たちの手記からも裏づけられている。

シルクロードの隊商。中世の地図挿絵



繭から糸を紡ぐ技術を発明したのは、中国の黄帝の後、西陵氏であると言われ、紀元前2700年ごろのこととされる(1, 351ページ)。伝承によれば「英明なる后は、絹糸から織物をつくることを命じた上で、桑の葉を摘み、蚕に食べさせる時期の年中行事を定めた。繭から糸を紡ぐ習慣は、たちまち全中華帝国に普及し、そこから日本へ、次いで南アジアと西アジア、すなわちインドとペルシャに

伝わった」。中国ではその富が入念に守られ、養蚕事始めと製糸にかかわる各種の伝説が広まり、その秘術を漏らそうとする者は死罪に処せられた。

紀元前2-1世紀、養蚕は中国から中央アジアに伝来し、そこから徐々に、トルキスタン、ブハラ、ヒヴァ、メルヴ、ペルシャへと順次広まった。ペルシャでは養蚕が6世紀には知られており、7世紀にはすでにホラサン、アゼルバイジャン、タバリスタンに普及していた(3, 138ページ)。

アルバニアの歴史家モヴセス・カランカトゥヴァツィ(7世紀)は『アルバニア人の歴史』で次のように記している。「カフカースの高嶺の懐に抱かれたアルバニアは、あまたの天然の恵みにより、うるわしく妙なる国である。大いなるクラ川が悠然と国土を流れ、大小の魚をもたらし、カスピ海に注ぐ。川を囲む野には、パン、葡萄酒、石油、塩、絹、綿、数知れぬオリーブの木があふれている …」(2, 5ページ)。

革命前のアゼルバイジャン農業史研究家たち、ソ連時代の歴史家の一連の著作、さらにはアゼルバイジャン領内で行われた考古発掘調査により、アゼルバイジャンの養蚕開始はかなり早い時期にさかのぼることが証拠づけられている。

アゼルバイジャンの絹織物づくりに関する最古の資料は、紀元前第4-3千年紀のものとされるキュルテペの発掘出土品である。ミンギヤチェヴィルの銅石併用時代・青銅器時代の出土品には、布地片と粘土製柵柱がある。これらからわかるように、この地の住民は紀元前第3千年紀から織物づくりを知っており、紀元前第1千年紀にはすでに、織物づくりは陶器づくり・金属加工と並び、アゼルバイジャン有数の主要手工業となっていた(4, 81-82ページ)。ミンギヤチェヴィルの最古の織物は亜麻製であるが、紀元前2-1世紀及び1-2世紀には麻製であり、また絹・綿・毛も用いるようになっていた。

古代ギリシャの歴史家ヘロドトスは、「メディア人」、すなわち「カスピの門」周辺に住む民族(メディアとは、紀元前670年代から紀元前550年まで存続した国家であって、アゼルバイジャン領をその版図に含む)の衣服は絹織物製だったと述べている。また次のようにも記している。「彼ら(ペルシャ人)はメディアの衣服を、自国のものより美しいと見なし、身につけさえもする」(5, 55ページ)。

「... ミルの草原は古くより、有数の豊かな文化発祥の地であった。例えば紀元前320年、アルバニア公国の一部であったビルハン(ベイラガン)から、世界の多くの国に絹が輸出されていた」(6, 225ページ)。紀元後1世紀には、養蚕はホ



アゼルバイジャンの桑園は各地の工房に高品質の絹を供給していた

ラサン、アゼルバイジャン、タバリスタンほか、ペルシャ帝国各地のほとんど至るところに広まっていた(7, 713ページ)。こうした報告は、ミンギヤチェヴィルの考古発掘調査の結果、アゼルバイジャン地元産の絹糸・毛糸・綿糸がカタコンベや墓所で発見されていることから裏づけられる。

アルバニアの歴史家モヴセス・カランカトゥヴァツィの記すところによれば「アグヴァン人の国は、幸多く、うるわしい。...クラ川の岸には桑の木が豊かに生え、絹織物づくりのもとをまかなっていた」(2, 5ページ)。

9-10世紀における経済・農業の状況と手工業・商業の発展状況について、アラブの歴史家・地理家・旅行家たちが貴重な資料を残している。彼らの証言によれば、9-10世紀のアゼルバイジャンでは養蚕が広く普及していた。シャマフ、バルダ、シェキ、ギャンジャほかアゼルバイジャン各地方の住民が、基本的には養蚕を行っていた。

アラブの旅行家・作家アル・イスタフリーの言によれば、バルダからは大量



の絹がペルシャ、フゼスタンに輸出されていた(8, 7-8ページ)。別のアラブ人地理家イブン・ハウカルの記事によれば「バルダではさまざまな品物が絹からつくられる。... じつに桑の木は、誰でも摘むことができる。木には持ち主がなく、それを売り買いすることもない」(9)。

12世紀のアゼルバイジャンでは園芸・綿花栽培・養蚕がさらなる発展を遂げた。大詩人ニザーミー・ギャンジェヴィーはその作品で一度ならず絹に言及し、アゼルバイジャンの名匠たちの手になる絹織物をたたえている。叙事詩『イスカンドル・ナーメ』の第1部「シャラフ・ナーメ」で、ニザーミーはバルダについて、次絹糸を染める。西欧の細密画



のように記している。

「『この絹の上で おお宇宙の誉れ高き者よ

なんじの絵姿ほど 我にいとしきものはない』

王たちの肖像を 描ける絹を

早く持ち来たれと 彼女は言いつけた」(10, 227, 230ページ)

絹は、交易品目として珍重されていた。1221年、モンゴルの1回目のアゼルバイジャン襲来時、ギャンジャ市は彼らに絹織物を支払って解放されている(11, 706ページ)。

13世紀末から14世紀初めにかけて、絹と絹織物は、アゼルバイジャンを訪ねた欧州人旅行家たちの関心を引いた。黒海に船を通わせていたジェノヴァとヴェネツィアの商人たちは、カスピ海にも自前の船団を有していたとの資料がある。ヴェネツィア人マルコ・ポーロの1293年の報告によれば、ゲッリ(ギラン産)と呼ばれる絹を輸入していたジェノヴァ人は、カスピ海を往来するようになっていた。

カステイーリヤの使節ルイ・ゴンサレス・デ・クラビホは、バルダ、タブリーズ、シャマフほかアゼルバイジャン各都市産の絹織物の美しさと良質さをたたえ、次のように記している。「... 当地にはきわめて大量の絹を産し、絹を求めて当地には、ジェノヴァ、ヴェネツィアからも商人が来訪する」(12, 89ページ)。ヴェネツィアの旅行家アンブロージオ・コンタリーニは1465年シャマフに滞在し、絹と絹織物の生産技術に親しんだ。「当市シャマフでは、我が方でタラマン(タラマン・デイレマン。デイレムはギランの山沿い地方)として知られる絹を製造し、加えてさまざまな絹織物も生産している。その

多くは滑らかで、きわめて良質である」(12, 91ページ)。コンタリーニの伝えるところによれば、シルヴァン産の絹はロシア商人が毛皮・はちみつ・蠟と交換していたという。

ウズン・ハサンの宮廷に長く滞在したヴェネツィア人ジョサファト・バルバロも、シルヴァンの養蚕業の発展に関する貴重な資料を残している。

1465年、シルヴァン・シャー(王)ファルフ・ヤサルは、モスクワ大公国とシルヴァン間に友好・交易関係を樹立すべく、ハサン・ベクを団長とする使節団に贈り物を持たせ、モスクワのイヴァン3世大公に遣わした。イヴァン3世からの答礼として、ヴァシーリー・パーピンが山ほどの贈り物を携えてシャマフに來訪した(13, 194ページ)。1466年にはトヴェーリ商人アフナーシー・ニキーチンが、同業者であるトヴェーリ商人たちとともに、船を2艘しつらえて商品を積み、ヴォルガ川をシャマフへと旅立った(14, 33ページ)。

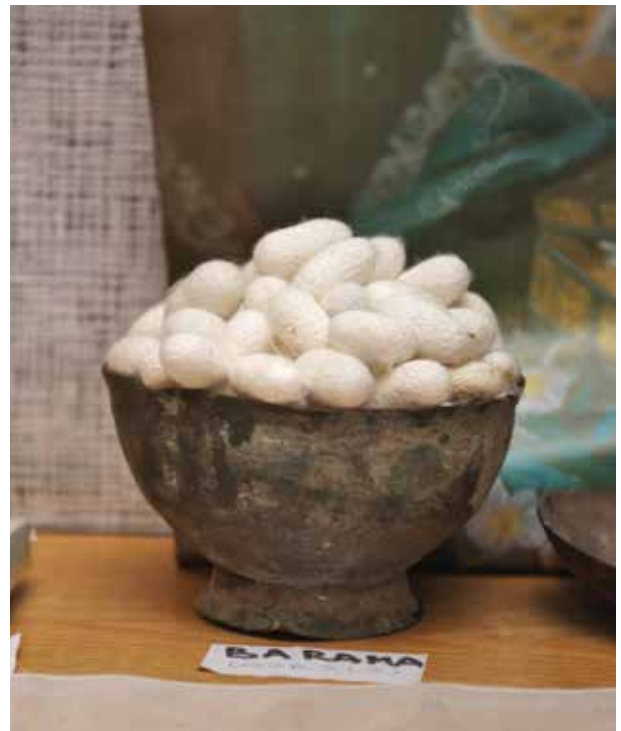
16世紀には、アゼルバイジャンの経済生活に活況が訪れた。アゼルバイジャンの歴史上でこの時期は、アゼルバイジャンに発祥し、短期間に強大国となったサファヴィー朝の成立・興隆と関連するさまざまな動きで特徴づけられる。絹糸と絹製品が、サファヴィー朝からの輸出品の7割を占めていた。16世紀末にはシルヴァンから毎年、最大10万ポンドもの絹が輸出されていたと述べれば事足りよう(15, 243ページ)

西欧の旅行家ヨハン・シルトベルゲルが、シルヴァンとシェキ地方の肥沃ぶりに触れて述べたところによると、シルヴァンでは「最高級の絹」を産出しており、その絹糸からダマスカス、カシャーで良質の布地を生産していた。... 絹はヴ

ェネツィアにも輸出され、それを用いて「極上のピロード」がそこで織られていた(12, 91ページ)。

古くよりインドから欧州への商品搬入は、隊商ルートにより陸路で行われていたが、16世紀にはいわゆるヴォルガ・カスピ海ルートが開拓される。このルート上で大きな役割を果たしていたのが、カスピ海沿岸で絹の大産地である、シルヴァンとギランの両地方であった。これに関連して、絹貿易の重要港としてのバクーの意味合いも増した。

1453年、メフメト2世征服王によるコンスタンティノープル制圧後、旧ビザンティン帝国領内にオスマン国家が根を下ろした。欧州商人たちは、オスマン帝国を迂回する東方との新交易ルートを求めた。これに関連して、欧州からアゼルバイジャンとイランへの主要ルートは北寄りに移動し、ロシアを経由するようになる。この時代から欧州の旅行家がヴォルガ・カスピ海ルートを利用して、シルヴァ



ンに来訪するようになった。シルヴァンの主要な貿易中継地点は、デルベントとバクーであった。バクーの港町としての重要性は、15世紀以降、さまざまな中世の旅行家がカスピ海を指して、バクー海と呼んでいる(クラビホ、バルバロ、コンタリーニ、アンジョレッコ)ことから知られる。

タブリーズ、シャマフ、ギャンジャ、バクー、ナフチュヴァン、ミンギヤチェヴィルほかアゼルバイジャン各都市の経済生活について、17世紀トルコの旅行家エヴリヤ・チェレビが、貴重な興味深い

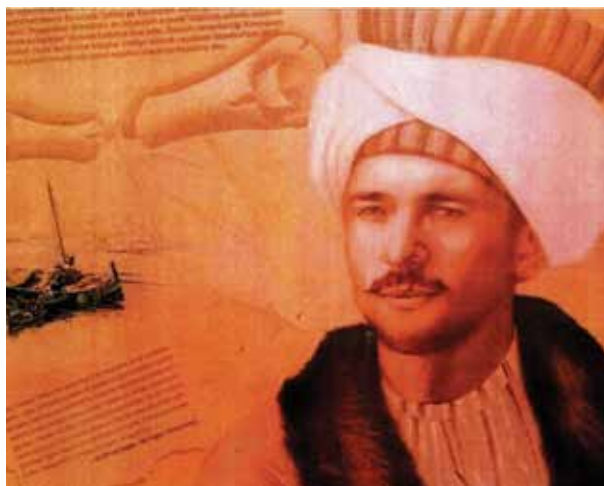
イタリアの旅行家マルコ・ポーロ



報告を多く残している。

エヴリヤ・チェレビはその手記で、バクー周辺で桑の木が栽培され、その葉を蚕に与え、養殖していた事情を詳述しているが、アブシェロン半島の村々で養蚕を行っていたことが、これを裏づけている。E. チェレビはまた、バクーからの絹の輸出についても報告している。後年の19世紀初めの文献では、バクー地域の絹糸採りに直接言及している(12, 205ページ)。

ドイツの旅行家アダム・オレアリウスによれば、1630年代のアゼルバイジャンで



は毎年1万から2万包の絹糸を採っており、うちシルヴァンが3000包、カラバフの分が2000包だったという(16, 48ページ)

1715年にロシア国家の使節としてサファヴィー朝に派遣されたアルチェーミー・ヴォルインスキーの記録によると、シルヴァンでは養蚕に格別の関心が寄せられ、製糸工房のない村は、クラ川の流域にはなかったという(17, 11-12ページ)。

英国の商人・旅行家G. フォースターはアゼルバイジャン東北部に滞在し、「シルヴァンは絹の大産地である。シルヴァン全体で毎年400トンの絹を外地市場に出荷する」と記している(18, 136ページ)。

1730-40年代の別の文献によれば、シャマフには650もの織機があり、市内に129もの絹織物生産施設を数えたという(19, 53ページ; 20, 788ページ)。

S. ブロネフスキーは、高品質の絹がシェキにはふんだんにあることに触れ、こう記している。「農業—シェキ・ハーン国住民の最大の生業—といえは養蚕業である。... 当地に産する絹はきわめて多く、その良質さにおいてシャマフのものに劣らない」(21, 440-441ページ)。

アゼルバイジャンの絹糸はロシアの織

旅行家ジャン＝バチスト・タヴェルニエ

物工業にとって、大きな役割を占めていた。18世紀末にはシャマフだけで、モスクワの繊維産業で用いる絹糸をほぼ完全にまかっていた。

ある記録によれば、1767年春にバクーからアストラハンへ2000プードの絹糸が海路で輸出され、別の公的資料によれば、3000プードにもものぼったという(18, 422, 423ページ)。

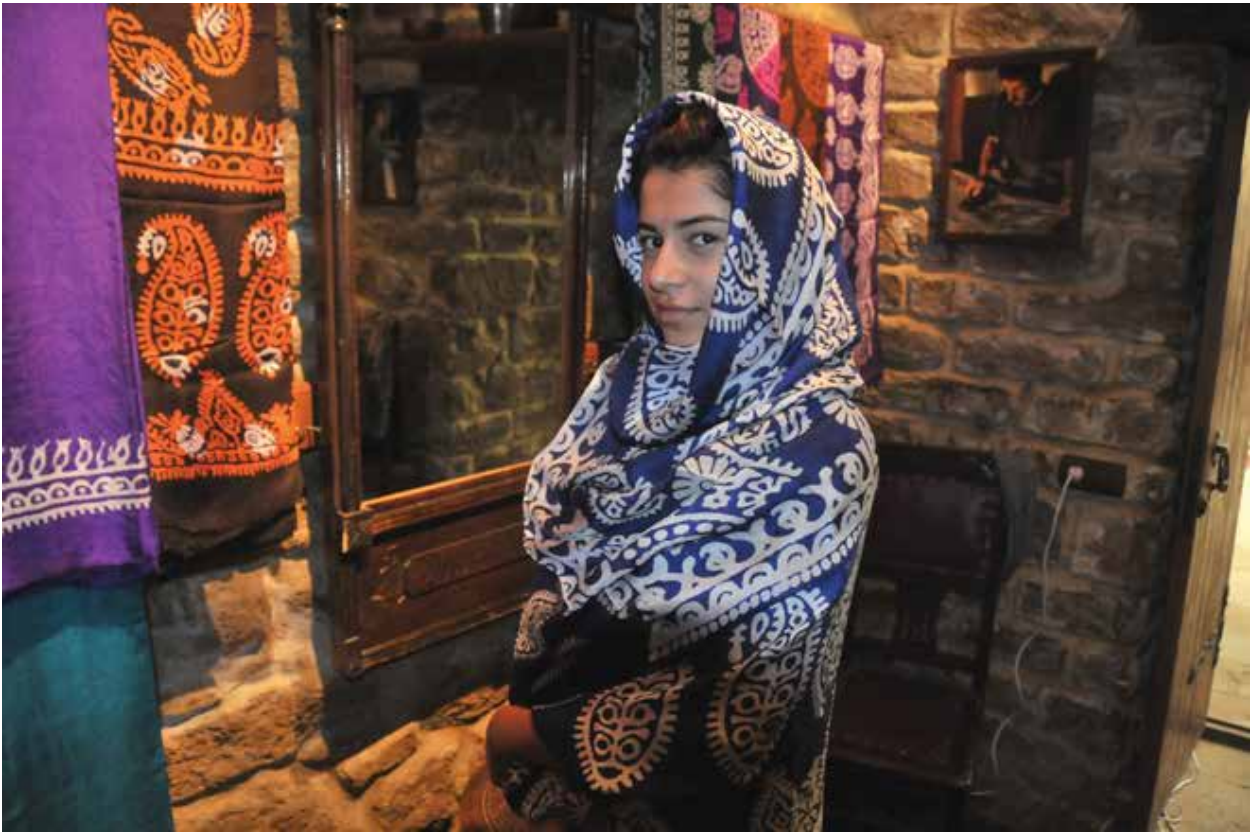
17-18世紀のバクーは、シャマフほか諸都市との絹の国際中継貿易において、カスピ海最良の港であった。「... 当地は掛け値なしに、全カスピ海で有数の、貿易に適した港湾であり、とりわけ、規模も人口も当地方で最大の都市と考えられ、当地からわずか3日の旅程にあるシャマフとの交易においてはそうである。シャマフにはあらゆる東方諸国の商館があり、それゆえにこの都市には、あらゆる国から来訪者がある ...」(12, 218ページ)。手記でバクー港についてこのように記したのは、1723年にバクーを訪問した英国人P.A. ブルースである。バクーにはインド商人の居留地もあり、大資本を誇っていた。彼らは港湾の近くに自前の隊商宿を持ち、そこに起居していた。1683年には学者・旅行家E. ケンペルがバクーを訪れ、興味深い報告を残している。彼はこの隊商宿で、「ムルタン」族のヒンドゥー商人たちと会ったことに触れている。インド商人はアゼルバイジャン商人と合わせ、年に最大400包もの絹糸を、バクー経由でアストラハンへと輸出していた(12, 220ページ)。

インドから商人たちが持ち込んでいたのは、各種香辛料、主としてカシミールで製造され東方で広く普及していた毛織物、目方分の金の値打ちがあつたいわゆる「ティルミヤ」、それに、金糸・銀糸

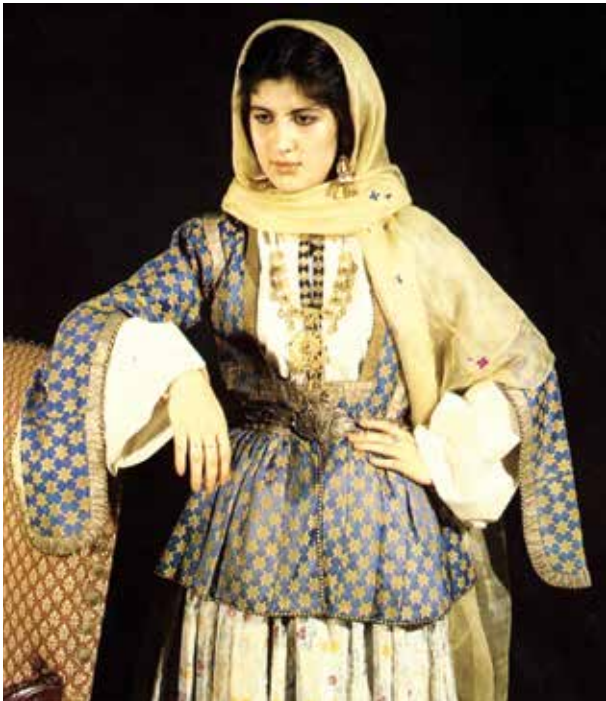


刺繍入りの絹織物である(22)。旅行家バローによれば、シルヴァンで彼が滞在した地方では、高額品といえ、絹以外のものを買うことができなかった。以上に述べた旅行家たち以外にも、16世紀末にはアンソニー・シャーリーやウィリアム・パリーら、アゼルバイジャンに滞在した者がほかにもあった。

旅行家タヴェルニエの見立てによれば、アルダビール市は1560年代、サファヴィー朝有数の重要都市と見なされており、そこでは何よりも、絹が活発に取引されていた。それは、この旅行家の言によれば、この都市の位置がギランと、国際交易で有数の重要品目である絹糸の大量産地であるシルヴァンとの間にあることに助けられたという(23, 166ページ)。



17世紀全体を通じ、ロシア国家とサファヴィー朝イランとの関係は平和的性格の、主として共通の経済的利害に基礎を置くものであった。数年の間にイラン



ヘチーホノフとブハロフ(1613)、レオンチェフとチモフェーエフ(1616)、ボリヤチンスキー(1618)ほかの使節らが遣わされた。その後サファヴィー朝をF.A. コトフ(1623)、アルチャーミー・スハノフらが訪れている(23, 21ページ)。

16世紀にはすでに確立していたアゼルバイジャン・ロシア間の交易関係は、17世紀から18世紀前半にかけ、アレクセイ・ミハイロヴィチ大公とピョートル1世の時代に大幅に拡大した。交易品目はバクーの石油、塩、サフラン、絹糸、絹織物と綿織物、じゅうたん、ラクダ毛、皮革、家畜、魚、魚卵、果物、パン、銅食器、武器ほかの商品であった。

17世紀から18世紀初めにかけてイラン、アゼルバイジャンとの交易関係を拡大したロシアは、カスピ海での絹の国際中継貿易に適した港を必要としていたが、バクーがまさにそれであった。このこ



とが、ピョートル1世による1723年のバクー占領の一因ともなった。同じ年にピョートル1世は特別令により、イラン駐在ロシア商人の貿易会社を設立している。

1739年にイランとアゼルバイジャンを訪問した英国人旅行家・商人ジェームズ・スピルマンの報告によれば、ロシア商人はイラン、アゼルバイジャンとの交易を、アストラハン経由のカスピ海ルートで行っていた。このときアストラハンに來航した船についてスピルマンが記している。そのうち1艘には、ロシア向け商品が200包積まれていた。そのほかに、英国商人(スピルマンと同業者)に売約済みの絹もあった。スピルマンの報告からもわかるように、このころ絹の輸出は、重要性が低下していた。

1790年代にロシアの絹工業は急速に発展した。ロシア商人は、絹糸・毛・綿といった原料を買いつける市場だけでな

く、国産品の市場をも必要とするようになった。バクーとキズリヤルを経由するロシア・アゼルバイジャン間の経済関係は幅広く発展した。この時期におけるバクー経由のロシア・アゼルバイジャン間交易の発展は、ロシア商人を庇護したファタリ・ハーンの親ロシア姿勢にも助けられた。絹は密輸によっても、バクー、シェキ、デルベントからアストラハンへと持ち込まれることが多かった。

18-19世紀アゼルバイジャンの織物工業は、3つの独立した方向に発展した。綿織物工業(ベツザズルグ)、絹織物工業(イペク・トフマ)、毛織物工業(シヤルバフルグ、ユン・トフジュルグ)である(26, 8ページ)。

バクーを訪問した英国人旅行家フォースターは、絹貿易の主要港としてのバクーの役割の大きさに触れて、こう記している。「トルコから欧州に持ち込まれる



ロシア商人アフナーシー・ニキーチン

絹は、オスマン帝国産と長く考えられてきたが、ペルシャ貿易をより深く調査した結果、トルコ商人がギランとシルヴァンに赴いて絹を大量に買いつけ、その後欧州に発送していることが示された(12, 275ページ)。彼の報告によれば「シルヴァン地方は相当量の絹を産し、毎年400トンがアストラハンに運ばれている」。

1796年にバクーを訪れたマルシャル・フォン・ビーベルシュタインはこの都市が、カスピ海で唯一の、大規模かつ便宜のよい港であると語っている。

フランスの旅行家G.A. オリヴィエは1798年、バクー、アンザリー、サリヤンに自前の商館を有していたロシア人の商取引について報告している。これらの各港からロシア商人はアストラハンへ、ギランとシルヴァンの絹、綿、コメ、純絹織物、金を織り込んだ絹帯を輸出していた。ロシアはまたイランからバクー経由で、絹の加工に用いるトラガカントゴムを輸出していた。英国の宣教師M. トウックが18世紀末にバクーについて述べたところによると、バクーでは商業がデルベントよりも盛んであり、バクーはシャマフと

交易し、そこから絹糸と絹製品を入手していたという(12, 277ページ)。

1830年代になると、ロシアの政権周辺でも、商工業界でも、ザカフカース地方、とりわけアゼルバイジャンの経済開発に着手しようとする意図が認められるようになる。1840年代と60年代には、インディゴ、ビーツ、タバコ、綿といった高価な作物をアゼルバイジャン農業に導入しようとする最初の試みが行われ、桑の品質改良にも力が注がれた(24, 34ページ)。1836年には「ザカフカース養蚕業・商工業普及協会」が設立された。A. Kh. ベンケンドルフ伯爵、V.V. ドルゴルーコフ公爵、M.A. ドンドウコフ＝コルサコフ公爵、A.E. ジャドフスキーが協会トップを歴任した。

1850-60年代は「カフカース養蚕業の黄金時代」であった。この時期、絹の生産も、アゼルバイジャンからロシアへの輸出も、成長が続いた。『カフカース』紙によれば「シェマハ(シャマフ)県だけで、フランス全土の生産量の半分近くを産出している。地元住民たち自身も、絹を多用している」(25)。

アゼルバイジャン養蚕業の発展については、1880年代半ばにバクーに出張したF. シマノフスキー、V. ゲエフスキー、N. ライコが興味深い報告を残している。商業的農業の例に漏れず、アゼルバイジャンの養蚕業は「金を稼ぐ手段の一つに過ぎなく」なっていた。◆

文献:

1. Тихомиров А. Основы практического шелководства, М., 1895 г.

2. Моисей Каланкайтукский. История Агван. кн. II, гл. 16, кн. 1, с. 5.

3. Шавров Н.Н. Очерк шелководства в Закавказье. СМЭБГКЗК т.IV Тифлис 1888.

4. Тревер К.В. Очерки по истории и культуре Кавказской Албании. М-Л., 1959.

5. Геродот. История в девяти книгах. Книга первая. Л., 1972.

6. Деконский А. Материалы по изучению «Экономический быт государственных крестьян в Шушинском и Джебраильском уездах Елисаветпольской губернии». Т.IV.

7. Натраев А. Шелководство в Закавказье. Газ.КСХ, 1897, №99.

8. Ал Истахри. Книга путей и царств. //Н.А.Караулов. Сведения арабских писателей о Кавказе. СМСМПК. Вып. XXIX. Тифлис, 1901.

9. Ибн Хаукал. Книга о дорогах и странах Азербайджана, Арран и Армении. // Н.А.Караулов. Сведения арабских писателей о Кавказе. СМСМПК. Вып. XXIX. Тифлис, 1901.

10. Низами Гянджеви. Искендернаме. Ч. I. Шарафнаме. Баку, 1953.

11. Бартольд В.В.. Место прикаспийских областей в истории мусульманского мира. //Сочинения, т.II, М., 1963.

12. Ашурбейли С.Б. Очерк истории средневекового Баку. Баку, 1964.

13. Петрушевский И.П.. Государства Азербайджана в XV в., Баку, 1965.

14. Хождение за три моря Афанасия Никитина 1466-1472 г.. М-Л., 1948.

15. История Азербайджана, т.I, Баку, 1958.

16. Гейдаров М.Х. Ремесленное производство в городах Азербайджана в XVII веке. Баку, 1967.

17. См. Журнал посланника Волынского 1715-1718 гг.



18. Абдуллаев Г. Азербайджан в XVIII веке и взаимоотношениях с Россией. Баку, 1965.

19. Левиатов В.Е. Очерки из истории Азербайджана в XVIII веке. Баку, 1948.

20. Семенов П. Географическо-статистический словарь Российской империи. Т.V, СПб., 1885 г..

21. Броневский С. Новейшие географические и исторические известия о Кавказе. ч.I, М., 1823.

22. Английские путешественники в Московском государстве в XVI в. Перевод с англ. Ю.В.Готье. Л., 1938.

23. Рахмани А.А. Азербайджан в конце XVI и в XVII веке. Баку, 1981.

24. Сумбатзаде А.С. Сельское хозяйство Азербайджана в XIX веке. Баку, 1958.

25. Газета «Кавказ», 1852, №40.

26. Гулиев Г. Ткачество. Баку, 1983.